

「玉砕」と桜—アツツ桜とその受容…補遺—

内村文紀

戦中、「玉砕」の象徴とされた「桜」——「アツツ桜（ヒメエゾコザクラ）」の「誕生」と、その「受容」の一端については拙稿「玉砕」の桜——アツツ桜とその受容——（『青山語文』第四十七号、平成二十九（二〇一七）年三月、青山学院大学日本文学会）（以下、本文中では「前稿」と表記）で述べた。本稿では、前稿において諸都合により省略した事柄を紹介し、前稿の補遺を行うことを目的とする。

1. 「アツツ島の英霊を歌へる」と「噫アツツ島」との本文異同

前稿にて先送りにした佐藤春夫の詩「噫アツツ島」（『奉公詩集』昭和十九年三月、千歳書房、二四～二九頁）と、時期的にも表現的にもその初出形とみられる「アツツ島の英霊を歌へる」（『中部日本新聞』昭和十八年六月四日朝刊）とのあいだに見られる異同を記す。これに先立って、前稿でも紹介したが、利便性を考えて本稿でも「アツツ島の英霊を歌へる」の書誌情報と詩本文を示す。

○書誌情報・「アツツ島の英霊を歌へる」、『中部日本新聞』昭和十八（一九四三）年六月四日朝刊掲載。大題目として「玉砕頌」と記されており、詩の上部の画家・野間仁根によるアツツ島の全景とおぼしき挿絵と同じ囲み内に掲載されている。
次いで全文を引く。

- 1 奥太平洋上、北陸の一孤島
- 2 守備にありて敵は近く
- 3 祖國遙に郷信絶えたり
- 4 ツンドラ地帯なれども
- 5 愛國の熱血は凍らねば
- 6 志は日を経て益々堅く防備は全し
- 7 氷雪に埋れて久しく春暉を待つ
- 8 蓋し大に戦はんとなり
- 9
- 10 天日未だ春ならざるに
- 11 一朝敵兵は濃霧に乗じて

12 東、南、北、三方より來り
13 蒼蠅なす賤奴らは刻々に増援し
14 我に十倍す。地の利を占め
15 運び得て 物饒なり
16 海、空、陸、巨彈は飛んで
17 十方よりわが堡壘に來る
18 北陸、曉は早く暮は晚く
19 防戰の一日は永く反撃に暮れゆく
20 生死もと論ぜず勝算奮戰にあり
21 南八男兒、豈衆寡を問はんや
22 援兵を求めず彈藥を請はず
23 重んずるところ一命にあらず
24 悠久の大義に生きざるを耻づ
25 期するところは一騎當千
26 戰陣訓を実踐せんのみ
27 相勵して士氣いよく昂る
28 我に剛毅沈勇の山崎大佐あり
29 勇將の下弱卒なく その数すべて二千数百
30 一夜肅として二旬の健闘善戰を相犒ひ
31 皆瓦全を求めず 大義を望み玉碎に勇む
32 敢闘に堪ふる者今僅に百数十名

33 誓つて肉彈を敵陣に突入し
34 白兵の一戰を期す
35 病みて決戰の行に加はり得ざる者は
36 皆切齒屠腹して一身を戰友に餞け
37 以て行を壯んにし
38 魂魄をして隊伍にあらしむ
39 生死を超越せる一隊は
40 夜半マサツカル峠に殺到し
41 大に敵が集團を壊滅せり
42 山崎部隊長の報告は
43 兵馬恹恹の間死を目前にして
44 綿密詳細を盡し 行間おのづからに
45 全員 敢闘必死の意あり
46 一讀 北海の風雲最も迫れるを見て
47 電波はアツツ島に到れども闕寂として答なし
48 蓋し神州の兵既に從容として悠久の大義に生き
49 皆 護國の鬼と化して
50 地に一員をだに残さざるなり。
51
52 海波はマサカ湾頭より遠く祖國に寄せて
53 いざ速かに蒼蠅なす鬼畜を撃てといふ。

- 54 噫 アリユウシヤンのアツツ島
 55 壯烈忠勇の士二千数百が墳墓の聖地なり
 56 二千六百三年五月二十九日以後
 57 奥太平洋の地圖は義を知る人何者か
 58 涙なくしてひらくことを得んや

(行頭番号は内村)

続けて「アツツ島の英靈を歌へる」と、「噫アツツ島」との本文
 異同を記す。なお、三字下げの解除も含んでいる。

行番号 「アツツ島の英靈を歌へる」 ↓ 「噫アツツ島」

- 5 凍らねば ↓ 凍らねば
 6 日を経て ↓ 日を経て
 7 春暉 ↓ 春暉
 13 賤奴ら ↓ 賤奴
 増援 ↓ 増加
 15 饒なり ↓ 物饒かなり
 17 堡壘に來る ↓ 堡壘を侵す
 18 北陲 ↓ 北陲
 19 暮れゆく ↓ 暮れ行く

- 19 と 20 のあいだに「一行アキ」
 21 南八男兒、 ↓ 南八男兒
 24 耻づ ↓ 恥づ
 26 実践 ↓ 實踐
 27 相励して ↓ 相勵まして
 いよ／＼昂る ↓ 愈々昂る
 29 勇將 ↓ 勇將
 その數 ↓ その數
 二千數百 ↓ 二千數百。
 29 と 30 のあいだに「一行アキ」
 31 瓦全 ↓ 瓦全
 32 百數十名 ↓ 百數十名
 35 病みて決戰の ↓ 病み脚萎えて決戰の
 36 切齒屠腹屠腹 ↓ 切齒屠腹
 37 壯んにし／ 魂魄をして ↓ 壯んにし雄魂をして
 38 と 39 のあいだに「一行アキ」
 39 一隊は ↓ 一隊は星座を驚かせて
 夜半マサツカル峠に ↓ マサツカル峠の夜半に
 41 壊滅せり ↓ 壊滅せり。
 41 と 42 のあいだに「一行アキ」
 兵馬倥傯 ↓ 兵馬倥傯

- 44 盡し 行間おのづから ↓ 盡し、行間おのづから
 45 全員 敢闘必死の意あり ↓ 全員敢闘の意氣あり
 46 一讀 北海の風雲最も迫れるを見て ↓ 一讀北海の風雲最も急なるを見る
 46 と 47 のあいだに「一行アキ」
 47 電波はアツツ島に到れども閑寂として答なし ↓ 電波は北に飛んでアツツ島に到れども／全島今は寂閑として答へなし
 48 大義に生き ↓ 大義に生き、
 49 皆 護國の鬼と化して ↓ 皆、アツツ櫻を朱に染めなして護國の鬼と化し
 50 地に一員を ↓ 地に一員を
 52 海波はマサカ灣頭より ↓ ただ海波はマサカ灣頭より
 53 蒼蠅なす ↓ 蒼蠅なす
 54 噫 アリュウシヤンのアツツ島 ↓ 噫、アリュウシヤンのアツツ島
 55 二千數百 ↓ 二千數百
 聖地なり ↓ 聖地なり。
 57 何者か ↓ 何人か
 58 涙なくしてひらく ↓ 涙なくしてこれを開く
 得んや ↓ 得んや。

前稿でも記したが、佐藤春夫の「アツツ島詩」のうち、「アツツ島の英靈を歌へる」だけが「アツツ櫻」を詠んでいないことと、詩の発表日（昭和十八年六月四日）から、「アツツ櫻報道」（昭和十八年六月二日）を受ける以前に作詩されたものと見られる。この詩には改稿後の「噫アツツ島」にあるようなアツツ島守備に驚かされる「星座」もなければ、兵士らの血で朱に染められる「アツツ櫻」もない。さらに17行目の「堡壘に來る ↓ 堡壘を侵す」のような、細かいが読み手の受ける臨場感が段違いな表現等を見るに、やはり完成度は「噫アツツ島」のほうが高い。「アツツ島の英靈を歌へる」は、佐藤春夫の「アツツ島玉碎觀の「原石」というように見るのが適切だろう。改稿前後で変らずにあるものは、玉碎へと進む守備隊の死闘と、アツツ島へ送った「電波」に対する答えはないが、その代わりに「いざ速かに蒼蠅なす鬼畜を撃てといふ」、「護國の鬼」＝鬼神（軍神）と化した玉碎兵士の「海波」が「祖國」へ寄せるという、位相の転換、そして何よりも、なお冷めることのない「詩人の熱量」であろう。

2. 当時の「桜観」と「アツツ櫻」補遺

「桜観」について、前稿では小川和佑の著作を中心に述べたが、当時の「桜観」を非常によく表した文章として『文藝春秋』第二十一

巻第四号（昭和十八年四月、文藝春秋社）の一二八頁「編輯後記」を紹介しておきたい。「櫻は日本の國土の精華であり、櫻に對する深い愛着の中に日本人は自己と國土の一體感」を抱く。「櫻は日本人に取つて單なる花ではなく、手を差し出せば何時でも觸れることの出来る眞善美の至高なるものの姿」であり、「ハワイの九軍神の一人も自分を若櫻と呼んで大君の邊に散つて行つた。櫻に寄せる日本人の心には切つても切れない武士道と忠節の聯想が纏ひ附いて」おり、その「櫻咲く此の清淨な國土は斷じて夷狄に汚させてはならない」（傍点・内村、以下同様）。

傍点部から、當時の國家主義の一端を見出すことは難くない。一方で、「櫻は日本の國土の精華」「櫻咲く此の清淨な國土」とあるのは、

櫻は清明美で、あらゆる夷類惡靈の侵入を阻む聖樹であつた。

家桜は結界として植樹された。（中略）

平城京以後、首都には桜を欠くことができなかった。¹⁾

という小川の記述からはややずれており、昭和十八年四月時点では、桜の聖性の及ぶ守護領域が首都に限定されていないことが確認できる。「桜観」が小川の述べたような変遷²⁾を辿っていることは確かであるが、「変質」しているというよりも、新概念を「包括して肥大」していったものとみられよう。

次いで、前稿では紹介しなかつた「アツツ桜」関連の資料を示す。「アツツ桜」が登場する戦中の文章は次章で紹介する。

「可愛い少女や花」、『讀賣新聞』昭和十七年十一月十五日朝刊。

少女と花が描かれた「繪便り」が掲載されている。描かれた花は五弁であり、葉の形も考慮すると「アツツ桜」のようにも見受けられる。しかし、この手紙が送られたのは「奇跡の撤退作戦」で知られる「キスカ島」からであり「アツツ島」からではない。また記事中にも「その花はなんといふ花かわかりません」とあるように「花」としてしか認識されていなかった。以上から、この花は「アツツ桜」としての受容はされなかつたと考えられる。なお、「アツツ桜」に「ヒメエゾコザクラ」の名を付けた（詳細は前稿を参照）館脇操の歌集「丘」（昭和四年九月、東京詩學協會）の表紙にもこれと似た花が描かれている。

「鎮魂のアツツ桜」、小山田恭一編『第三八一野戦郵便局』——アツツ島で玉砕された北海道のポストマン——、平成十三年五月、北見維学研究所。

同書一四九頁には「アツツ桜」に関していくつかの記述⁽³⁾がある。しかし、挿絵として描かれている花は、花の形、葉の形とその付き方から判断して、ロドヒボクシスであると見られる。戦後、ロドヒボクシスが「アツツ桜」として受容されてきたという混線を窺える資料の一つである。

3. 戦中の「アツツ桜（ヒメエゾコザクラも含）」登場文献

まず、章題を表にしたものを示す。なお、一覧中の文献は前稿を記すにあたって見つけたものであり、ここで示したものが全てではないだろう。それでも今後の一助となれば幸いという理由から提示する。以上、あしからずご了承を願う。

凡例

「名前」は、作者、著者、編者とされている者。「ジャンル・題名」は「ジャンル・作品題名、章題等」の順に記し、また個別の題名等のないものは空白とし、「読み物」としたものは分類しがたいものを便宜的にそう呼称した。登場しているものが「ヒメエゾコザクラ」の場合には題名の後に☆を付した。「年月日」は新聞雑誌等の場合は発行日、日記の場合は書かれた日付を記した。なお、註は一覧の後にまとめて記してある。

○戦中の「アツツ桜」登場文献一覧

名前／ジャンル・題名／書名・巻号／年月日／発行元

1 深澤幹藏／歌詞・熱田進軍歌（i）／『アリュージュン襲撃戦記』／昭和十七年十二月十五日／大和書房

2 杉山吉良（ii）／新聞報道☆（iii）／全国紙・地方紙／昭和十八年六月二日／各新聞社

3 秋田雨雀／日記／『秋田雨雀日記』第三卷（iv）／昭和十八年六月三日／未来社

4 伊藤整／日記／『太平洋戦争日記』第一卷（v）／昭和十八年六月三日／新潮社

5 佐藤隆房／短詩連・アツツ桜／『新岩手日報』／昭和十八年六月五日／新岩手日報社

6 杉山吉良／随筆・アツツ島所思ひ出／『月刊讀賣』第一卷第二号／昭和十八年六月十八日／讀賣新聞社

7 佐藤義美／詩・アツツ桜の花なんか／『週刊少國民』六月二十日号／昭和十八年六月二十日／朝日新聞社

8 杉山吉良／随筆・花を撮す／『アリュージュン戦記』／昭和十八年六月二十日／六興商會出版部

9 高橋賢一郎／読み物・アリュージュン／『少女の友』第三十六卷第七号／昭和十八年七月一日／實業之日本社

- 10 阿部静枝／随筆・黙々たるの強み／『同盟グラフ』第十一卷第七号／昭和十八年七月七日／同盟通信社
- 11 毛利秋俊／読み物・特色ある植物と動物☆／『アリユシヤン』朝日時局新輯57／昭和十八年七月二十七日／朝日新聞社
- 12 穴田澄子／詩・アツツ櫻／『日本詩壇』第十一卷第八号／昭和十八年八月一日／日本詩壇發行所
- 13 百田宗治／詩・アツツの櫻／『少國民文化』第二卷第八号／昭和十八年八月一日／日本少國民文化協會
- 14 吉田絃二郎／随筆・アツツ島の英魂に誓ふ／『婦人俱樂部』第二十四卷第八号／昭和十八年八月一日／大日本雄辯會講談社
- 15 佐藤春夫／詩・軍神山崎部隊長の頌／『週刊少國民』九月五日号／昭和十八年九月五日／朝日新聞社
- 16 尾崎士郎／随筆・アツツ島の雄魂を憶ふ／『放送』第三卷第十号／昭和十八年十月一日／日本放送協會出版
- 17 金森重郎／詩・アツツざくら／『秋田縣人雜誌』第十六卷第十号／昭和十八年十月一日／秋田縣人社
- 18 佐藤春夫／詩・あつつ嶋玉碎部隊讃仰歌／『三田文學』第十八卷第十号／昭和十八年十月一日／三田文學會
- 19 深谷岩／作文・アツツ島の勇士に捧げる文／『少國民文化』

- 第二卷第十号／昭和十八年十月一日／日本少國民文化協會
- 20 富安風生／随筆・英靈に謝する道／『放送』第三卷第十一号／昭和十八年十一月一日／日本放送協會出版
- 21 田中菊波(vi)／俳句・アツツ櫻／『放送』第三卷第十一号で紹介／昭和十八年十一月一日／日本放送協會出版
- 22 村崎凡人／短歌群・アツツ櫻の歌／『槻の木』第十八卷第十一号／昭和十八年十一月一日／槻の木會
- 23 山本地榮(編)／読み物・アツツ櫻／『山崎軍神部隊』／昭和十九年一月十日／朝日新聞社
- 24 相馬基(編)／読み物・ツンドラに咲く花／『軍神山崎部隊』／昭和十九年一月三十日／毎日新聞社
- 25 佐藤春夫／詩・噫アツツ島／『奉公詩集』／昭和十九年三月二十五日／千歲書房
- 26 菊池正／詩・アツツ櫻／『樺太山系』／昭和十九年五月十五日／詩と歌謡の社
- 27 吉岡堅二／絵画・表紙／『繪卷アツツ島血戦』／昭和十九年七月五日／陸軍美術協會出版部
- 28 岩田九郎／評論・アツツ島玉碎／『戦ふ文章』／昭和十九年十一月二十日／研究社
- 29 小田觀螢／短歌／村崎凡人編／『軍神頌』／昭和十九年十二月十四日／青磁社

30 安井信一／短歌☆／村崎凡人編／『軍神頌』／昭和十九年十二月十四日／青磁社

31 秋山清／詩・白い花☆／『詩文化』第十三号（vii）／昭和十九年（viii）／不二書房

一 覧 ・ 註

（i）該当箇所が「アツツ桜」であるとわかるのは、24相馬基編『軍神山崎部隊』四頁による。

（ii）杉山吉良が「アツツ桜」の写真を報道部に持ち込んだため挙げた。詳細は前稿。

（iii）『讀賣新聞』昭和十八年六月二日朝刊の「可憐“アツツ桜”」のように「ヒメエゾコザクラ」が登場しているものもある。

（iv）秋田雨雀『秋田雨雀日記』第三巻は、昭和四十一年（一九六六）年二月二十五日の発行。

（v）伊藤整『太平洋戦争日記』第一巻は、昭和五十八（一九八三）年八月十日の発行。

（vi）『放送』同号の、富安風生「英靈に謝するの道」において紹介されている。

（vii）『詩文化』第十三号は昭和二十四（一九四九）年八月二十日の発行。

（viii）昭和十九年の『林業新聞』が初出とされている。『白い花』（昭和

和四一年十一月、東京・コスモス社）目次頁には昭和十九年制作とある。

続けて、それぞれの「アツツ桜」の表現を番号順で簡潔に引用する。頁数表記は一覧中に示した書名のもの。2については三本の記事（全国紙の東京版・大阪版、地方新聞）を引いた。詩歌についてはその性質上、ルビはそのまま残した。

1 「すみれ」の花に似た櫻草」（九四頁）

「あゝツンドラに咲く花の／何と可憐な美しさ／思はず止めたこの脚を／友よ笑ふないま行くぞ」（一九頁）

2 「五枚の櫻色の花瓣の先も二つに切れほゞ櫻に近い」（『勇魂に咽ぶアツツ桜』、『毎日新聞』昭和十八年六月二日朝刊《東京》）

「花びらは大きさも色も内地の櫻そっくり」「花の中央は暗紫褐色、黒、黄と美しい模様をまじえた神秘的彩りの花」（『勇戦を偲ぶ「アツツ桜」』、『朝日新聞』昭和十八年六月二日朝刊《大阪》）

「可愛いアツツ桜が今頃はもう綺麗な蕾をふくらませて、我が勇士の血戦に無言の聲援□（脱字…註、内村）送つてゐるであろう」（『北の涯に咲く可憐な花』、『鹿児島日報』昭和十八年六月四日

夕刊）

3 「外見、桜のような形をしているが、北洋特有の強烈な紫赤色を

ふくんだものらしい」(三七六頁)

4 「アツツ島の初夏に咲くアツツ桜という高山植物」(三四七頁)

5 「忍冬のアツツ櫻をまたで散る」「アツツ櫻戦陣訓の血を吸へる」

「アツツ櫻霧はをたけび雨震ふ」「七生のアツツ櫻や島の鎮」「アツツ櫻大和男子の魂まつれ」

6 「櫻に似てゐるのでアツツ櫻と呼んで最愛した小さな花」(二〇頁)

7 「アツツ櫻の花なんか 僕はきらひだ／今、アメリカ兵がそれを見てゐる。」「必ず アツツ島は占領する。／—— その時ならば 僕もすきだ／十の花べんのアツツ櫻の花。」(七頁)

8 「櫻草のやうな葉に、ピンク色をした櫻に似た小さな花をつける名も知れぬ花を、私達はアツツ櫻と呼んだ」(一九頁)

9 「美しい花が澤山咲いてゐました。いみじくも名付けたリアツツ櫻、あやめ、黒百合(以下略)」「アツツで散つた勇士の靈を慰めるかの様に、いや此の美しい花々に玉碎した勇士の英靈は宿るかも知れない、さうしてなほ敵にいとみかゝるであらう」(※頁)

10 「アツツ櫻の名をつけられた五輪のほのかな草花が、國內の人々の悼みと感謝と誓ひを現すやうに咲いてゐるでせうか」(二四頁)

11 「(略) アキノキリンソウ、ヒメエゾニコザクラ、センクワソウヒアツギアヤメ」「これ等の可愛い高山植物」(二七頁)

12 「新聞の寫眞を叮嚀に切り抜いて／今靜かに 膝にして眺めるア

ツツ櫻／五枚の花びら 正しくひらき／細い身を凛然と支へて立つ／大和撫子(なでしこ)にも似かよふ 美しさよ／北岸の孤島に 今も尚 おん身／在りし日の將兵を偲んで／忠魂を弔ふ」

「アツツ櫻／おん身 すでに一片の花ではない／我ら今 涙を拂つて／一億の心と數千萬に餘る日本女性の痛恨を托する／／戦塵は遠くはない。聽てこの身、この手で育て上げた第二第三の勇士を送らう／そのとき 萬朵と咲きほこるアツツ櫻」

「再び手にとつて眺めるアツツ櫻／永遠に かをつて在れ」(一〇〜一一頁)

13 「アメリカ兵の泥ぐつが踏みに行つたあとから、／その花はまた頭を擡げたであらう。」

「かぼそいその莖をゆし起して／あの夜の記憶を想ひゑがいたであらう。」

「誰もしらない、／しかしこの花だけは知つてゐる。／あの夜、自分たちの肩に觸れて、その花びらの一つ一つを小さく揺すぶらせて、／ざくざくのツンドラの上を入りみだれて進んで行つた／そのひとかたまりの人かげを、／靴のおとを、この花だけは知つてゐる。／——この花だけはおぼえてゐる。」(二〜四頁)

14 「そこには太陽もなかつた。勇士たちを慰めるものとしては、日本の櫻に似た花をかをらすたゞ一莖の野草が咲くのみ」(二五頁)
なお、掲載頁上下に桜のカットが入っている。

15 「語るべき人しなければ／かたれかし北斗の星よ／朱に染むアツツ櫻よ／將兵^{つはもの}ら玉と碎けし／血戦のマサツカル山^{やま}」(三三頁)

16 「うす闇の中に白い色をくつきりと浮かべせたアツツ櫻の花が唯一つ輝くばかりの光を放つて咲いてゐる寫眞を見て、思はず胸の迫るのを覺えた」

「野菊のやうなこの花に、「アツツ櫻」と命名した若き勇士たちの心を、私は、切なく、いとほしく思ひ描く」

「うす紅のアツツ櫻の葉かげに眠る勇士の靈」(三六―三九頁)
なお、三六頁上部には、アツツ島と「アツツ桜」と思しきカットが入っている。

17 「アツツ櫻を血に染めて／ツンドラの上に猛り立つ／北の邊土の防人^{さきも}は／肉も残さじ骨もなし。」(三頁)

18 「わななける北斗のしたに／咲きいでしあつぎくらを／朱にそめ まさつかる山の／戦^{たたかひ}に率^{ひき}ゐともなひ」(二―三頁)

19 「春をもまたアツツ櫻の咲くのも見ずにあなた方は枕をならべて討死をなさつてしまつたのですね」(四頁)

20 「アツツ櫻といふのは、たしか北邊特有の植物のやうに承知」

「兵隊さんが假にそんな名をつけた」

「櫻に似た花をつける小さい草を、自分たち日本軍人の心意氣を現はす「櫻」の名で呼んで(中略)アツツ櫻と勝手に名づけたといふのは、實に兵隊らしい無邪氣さ」「同時にまたそこに、たけ

き武士の、ものの情を知る反面が涙ぐましいまでによく現れてゐる」(四五頁)

21 「兵がつけしアツツ櫻^{もも}の名は朽ちず」(四五頁) なお、富安風生は20の文中でこの句について「國民の英靈に對するつきざる感謝が一句を裏付けてゐる」「アツツ島玉碎を詠つた俳句何百といふものを見たうちで、この一句の純眞素朴ほど、私を感動させたものはなかつた」と述べている。

22 「かの島にアツツ櫻の咲くといふ悲しく尊く忘れられぬかも」(三頁)

23 「アツツ島の残雪を踏んまえて立つた勇士の軍靴のあたりには、いみじくも勇士達がアツツ櫻と呼んだ可憐な花が、ひそやかに微笑みかけてゐた」(一一頁)

24 (一の註、内村)「歌にうたはれたその花は、誰がよんだか、『アツツ櫻』と名がついてゐました」「ハセセンチばかりの小さな花」「櫻によく似た形」

「勇士たちは(中略)この花をはじめ見て以来、いつまでもその花の色をなつかしがり、その姿をまぶたの裏にゑがいて、かうして歌にもうたふ」(四―五頁)

25 「皆、アツツ櫻を朱^{あか}に染めなして護國の鬼と化し／地に一員をだに残さざるなり。」(二八頁)

26 「遙か櫻に甦る故國の季節を喚んで／今は盡忠壯絶の鬼神となら

れた／二千有餘の防人たちは／みおとすほどの紅の色に／こゝろを染め　ねがひを秘めて／アツツ櫻とは／かなしくも名付けられたものであらうか」

「アツツ櫻の花々よ／根付く限りに／その岩礁岩礁が碎け散る日の果まで／かの神々の魂魄を止めて／たゞひたすらに／日本三千年の血のいろに咲け」（二三七～一三九頁）なお、詩の後に「東都毎日新聞紙上」に掲載された「アツツ櫻」の写真を見て作詩した旨の記述がある。

27 説明書き等は見られないが、花の色味、葉の形等から国内で流布された「アツツ櫻」像と重なるため、ここに加えた。なお、同書には藤田嗣治の《アツツ島玉砕》がモノクロではあるが収録されている。

28 10について総評として「いづれも皆女性の誠心のやさしさを行間に滲ませてゐる」

該当箇所について「紋情のかをり高い部分である。この花にアツツ櫻の名を與へたのもアツツ島の勇士たちであつた。それを作る者は「……の名をつけられた」とあらはし、勇士と縁淺からぬこの花に、悼みと感謝と誓ひをあらわして貰ふ外ない現実實に心を熱くしてゐる」（四七～四八頁）

14について「さすがに、一莖の花をもち來つたところは、この作者の筆」「やさしい一莖の花と比較して、荒涼たる雪の曠原が

いたましく思ひ出される」（四三頁）

29 「盡忠の血しほ滲みにし凍土帶アツツざくらは咲き顯ちにけり」（一五五頁）

30 「北海のアツツ島に咲く花のヒメエゾコザクラけふ知りにけり」（二〇六頁）

31 「ヒメエゾコザクラの花がさ（き）が脱字したと思われる…註、内村）／その五辯の白に見いつて／妻と子や／故②の思いを／春はひそめていた。」（二八頁）

この中から、7佐藤義美の「アツツ櫻の花なんか」を少し取りあげたい。

「アツツ櫻の花なんか　僕はきらひだ」から始まるこの詩は、敵国アメリカがアツツ島を落としたことへの憎しみと悔しさをアツツ櫻に重ね、この詩の読者として想定している少国民の視点で書かれている。アメリカの攻撃の描写と「勇戦」する日本の描写を記し、「僕」が玉砕へ向かう兵士の心理を「おれの後には　一億の日本人がある／おれが死ぬことは　一億の日本人が生きていることだ／おれはその一億の日本人の中に生きているのだ。／おれの仇はおれが討つ。（傍点ママ）」と読み、それに対し「僕たちが　あなた方のおれなのです／あなた方の仇は僕たちが討ちます（傍点ママ）」と答える関係をもつて、「山崎軍神部隊に続け」という「一億玉砕」の精神を現わし

ているといえよう。そして念願叶い、アツツ島を取り返した時、アツツ桜の花を「僕もすき」になるのである。「きらひ」と一度反発してみせてから徐々に思いを重ねてくるという「反抗期」の少年の心も同時に描いているこの詩は、最初から「アツツ桜」へ素直な思いを重ねる作がほとんどの中、異彩を放っている。

4. その他補遺

秋山清の詩「拍手」で登場している「雷撃機」についての補足を記す。海軍大佐・本内達三によると、当時の雷撃機は「攻撃機の一^⑤種」、「飛行機から魚雷を發射することが出来る装置を有するもの」と定義されている。

註

(1) 小川和佑『桜文化と日本人——美しい桜への招待』(平成二十三年四月、竹林館) 一〇～一二頁。

(2) 前稿に引用して記してあるが、今一度簡潔にまとめると「女性の化身、至高の美」(古代)、「豊穣と泰平を予兆」(平安)、「武士の花に変質」(江戸)、「軍国の花」(明治)、「散華の思想」(太平洋戦争)である。参考…小川和佑『桜と日本文化——清明美から散華の花へ』(平成十九年三月、アーツアンドクラフツ) 二七一、二七二頁。

(3) たとえば「スミレ程の大きさの淡いピンクの可憐な花が、桜の花に似ていることから、誰いうともなく『熱田桜』『アツツ桜』とよんだ」など。

(4) 藤田嗣治『アツツ島玉碎』(昭和十八年)には様々な花が描かれているが、杉山正己によると、「描かれている花は全部高山植物ですね。この紫色の花はルピナスといつて、アツツ島などに咲く珍しい花ではないかな。フジタのサインの傍で咲いている白い花はハクサンイチゲ。あとはワタスゲです。先生(杉山吉良のこと…註、内村)の写真を見た上で描いてますね」と述べており、「アツツ桜」は描かれていないとみられる。引用は平山周吉『戦争画リターンズ——藤田嗣治とアツツ島の花々』(平成二十七年四月、芸術新聞社) 三五九頁から。なお、同書同頁によると『アツツ島玉碎』は杉山吉良の写真をもとに描かれた、とのことである。

(5) 本内達三「魚雷の科学」『大洋』第四卷第六号、昭和十七年六月、文藝春秋社) 一二六頁。

(うちむら・あやのり/本学大学院博士前期課程)